

〈黄帝と老子〉雑観 第8回

『黄帝内経』には天を畏れる災異思想の痕跡がある？

『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ（その2）

『黄帝内経』 研究家 松田博公

第3回 [『黄帝内経』はタオの医学書なのか？ 『老子』『荘子』そして『荀子』](#)第4回 [『黄帝内経』に近いのは『老子』か『荘子』か
重層的な無の宇宙論と遍満する気の宇宙論](#)第5回 [勃興する戦国黄老思想 『黄帝内経』への遙かな道](#)第6回 [『黄帝内経』と戦国黄老の気の系譜 『黄帝四経』から『春秋繁露』まで](#)第7回 [『黄帝四経』～『春秋繁露』を貫く機械論的宇宙観
『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ（その1）](#)

1973年、馬王堆漢墓から出土し、『黄帝四経』と推測された4巻の書物は、現存最古の黄老文献であり、それを貫く「天道」思想こそ、いま便宜的に『黄帝内経』と総称する『素問』『靈枢』の医療思想の枠組みの遙かなルーツであるという仮説の下に、われわれは議論を進めてきた。ところで、『黄帝四経』の「天道」思想には、①天を人格神と捉え、悪い政治を行えば、天罰が下るといふ災異説の要素と②天をあたかも陰陽、五行、循環の法則に従う自然の存在とする機械論的宇宙論の二つの要素が結び付いていた。

■近刊情報

●抗重力鍼療法

重力負荷を取り除く刺鍼テクニックと疾患・症状別治療法
(内田輝和著)

今週号のPRの部屋はこちら

●クリニカルストレッチセミナー (2014/10/5)

■ヒューマンワールドのセミナー

●ダイエット・アロママッサージセミナー (2014/8/24)

●在宅ケア実践セミナー (2014/9/14,15)

●変形徒手矯正術セミナー (2014/12/7)

●「情報コーディネーター鍼灸」セミナー (2014/12/14)

★ヒューマンワールドの

本なら→→→→→ [こちら](#)



儒者・董仲舒の像 (Wikipediaより)

前回は、②の機械論的宇宙論が、その後の黄老文献にどう継承されているかを、漢代中期の『春秋繁露』までたどり確認した。では、黄老「天道」思想のもうひとつの要素、災異思想はどうであろうか。それを、手っ取り早く知るには、『春秋繁露』について見るのが便利だろう。というのも、『春秋繁露』は、王の権力の暴走に歯止めを掛ける目的で昔、周代に誕生した災異思想をより精緻に完成させた書物として有名で、これまで多くの研究がある。それらによれば、編者、董仲舒は、天の上帝は悪政に対して災異を降ろして譴告すると語り、早天に祈雨の呪術を行い人の側から天に影響を与えようとした天人相関論のオカルティ

ストということになっている。天は王の失政に対し、「災（災害）」と「異（怪異）」の二段階に分けて順次、警告を与えるが、それは仁の心によると説く次の文章は、よく知られている。

「天地の物、常ならざるの変有るもの、之れを異と謂う。小なる者、之れを災と謂う。災、常に先に至りて異乃ち之れに随う。災は天の譴（けん＝とがめること）なり。異は天の威なり。之れを譴して知らざれば、乃ち之れを畏れしむるに威を以てす。（中略）凡そ災異の本は、尽く国家の失に生ず。国家の失、乃ち萌芽し始めて、天は災害を出して以て之れに譴告し、之れに譴告して変ざるを知らざれば、乃ち怪異を現して以て之れを驚駭せしめ、之れを驚駭せしめてなお畏恐するを知らざれば、其の殃咎（おうきゅう、＝とがめ）乃ち至らん。此れを以て、天意の仁にして人を陥るを欲せざるを見るなり。謹んで災異を案じて以て天意を見るに、天意、欲するあるなり。欲せざるあるなり。欲する所、欲せざる所、人、内に以て自ら省みれば、宜しく心に懲（ちよう、＝反省点）あるべく、外に以て其の事を観れば、宜しく国に驗（けん、＝しるし）あるべし。故に天意を見る者の災異に於けるや、之れを畏るるも、而も悪（にく）まざるなり。以て、天、吾が過ちを救い、国が失を救はんと欲す。故に此れを以て我に報ずと為すなり。（略）。聖主賢君はなお忠臣の諫（かん、＝いさめること）を受くるを楽しむ。況んや天譴を受くるをや」（『春秋繁露』必仁且智）

◇災異思想～自然であって神という天の二重構造

この「災異」「天譴」の思想は、前回示したように初期黄老文献『黄帝四経』の核心だったが、『春秋繁露』との間に挟まれた『管子』『呂氏春秋』『淮南子』にも見られる。災異思想もまた、歴代黄老文献を途切れなく流れる根幹の思考なのである。

★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

★詳細は≫≫ [こちら](#)

★メディカル求人天国

鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は≫≫ [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は≫≫ [こちら](#)

「日は陽を掌（つかさど）り、月は陰を掌り、星は和を掌る。陽は徳為（た）り、陰は刑為り、和は事為り。是の故に日食すれば、則ち失徳の国之れを悪（にく）む。月食すれば、則ち失刑の国、之を悪む。彗星見（あらわ）るれば。則ち失和の国、之れを悪む。風と日、明を争えば、則ち失生の国、之れを悪む。是の故に聖王は日食すれば則ち徳を修し、月食すれば則ち刑を修し、彗星見るれば則ち和を修し、風と日明を争わば則ち生を修す。此の四なる者は、聖王、天地の誅（ちゅう）を免（まぬか）るるゆえんなり。信じて能く之を行えば、五穀蕃息し、六畜殖え、而して甲兵強し。治が積めば則ち昌え、暴虐が積めば則ち亡ぶ」（『管子』四時）

「是の月や、以て兵を称えるべからず。兵を称えれば必ず天殃（てんおう、＝天が降ろすわざわい）あり。兵戎起たず、以て我より始めるべからず。天の道を変えるなく、地の理を絶つなく、人の紀を乱すなかれ」

（『呂氏春秋』孟春紀・正月紀）

「人主（＝君主）の情（＝情態）、上（かみ）、天に通ず。故に〔人民に対する〕誅（ちゅう）、暴なれば則ち飄風（ひょうふう、＝暴風）多く、法令を枉（ま）ぐれば（＝曲げれば）則ち蟲螟（ちゅうめい、＝害虫）多く、不辜（＝無実の者）を殺せば則ち国赤地（＝枯れ野）となり、令もて收めざれば（＝時令に従って収穫しないと）則ち淫雨多し。四時は天の吏（＝官吏）なり。日月は天の使なり。星辰は天の期（＝時の定め）なり。虹霓（＝虹）、彗星は天の忌〔の現れ〕なり」

（『淮南子』天文訓）



晋长安の小説『淮南王』

中国古代の王は、基本的に欲望にまみれた独裁権力者であった。王に仕えて政治を行う者は、国の安泰のために、王権の横暴に歯止めをかける装置を考案しなければならなかった。中国古代において、秩序の源は天である。農耕、牧畜を支配する春夏秋冬の四時のリズムが、不変の秩序の範型となり、それを統括するのが天と考えられた。従って、王権の源も天にあり、王は天から人民統治の使命を与えられた「天子」だとされたのである。

「天子」の暴走にブレーキを掛けられるのは、論理的に天だけである。父なる天の名において、王の政治を批判するときのみ、君側の政治家は生命を保障される。それが万全ではなかったことは、史書が記載する多くの犠牲者の例が物語る。こうして、普段は黙々と機械的に自動運動し、地上の生活に無関心に見える天が、王の失政に対しては、突如、神格性を露わに災害、怪異を出現させて譴責するという天の二重構造の観念を、政治家たちは手放せなかった。

この自然であって同時に神であるという古代思想のアンビバレンツは、中国に限らない。科学史家、チャールズ・シンガーは古代ギリシャの場合についてこう言っている。

「ヒポクラテスの時代には、自然の作用を正確に予測できるような正確な観察は、天文学上の記録を別にすると、まだ数多くはなかった。したがって天体の規則正しい継起は、全自然が合致すべき典型として、信仰的に示された。諸天体は、規則的に循環する季節の変化を予告して、人間生活を規定している。これらの天体を季節の変化の原因とみなし、神々として扱うためには、ほんの一步前進するだけである。そしてこの一步前進は、しばしばおこなわれた。惑星はいまでも神々の名がついているし、アリストテレスでさえ、このような考えに達している」（『科学思想のあゆみ』岩波書店）

◇天に法る～『黄帝内経』は漢代黄老文献の傾向に合致する

前回から続く以上の長い検討を前触れに、ようやくお待ちかねの『黄帝内経』の「天道」思想について語る事ができる。問われているのは、『黄帝内経』の「天道」思想は、黄老文献とどう繋がるのか、「天道」思想からみて、『黄帝内経』は黄老文献と呼べるのか、である。

インターネットの中国語サイト「中国哲学書電子化計画」で検索すると、現存のいわゆる『黄帝内経』（＝『素問』『靈樞』）に、「順天」は1カ所、「法天」は6カ所使われている。前回の語彙分析の結果、漢代黄老文献は「順天（天に順う）」よりも「法天（天に法る）」の使用例が多いことが分かったが、『黄帝内経』はそれに合致している。そして「順天」「法天」は、『黄帝内経』では、「従陰陽（陰陽に従う）」「順天時（天の時に順う）」「法天之紀（天の紀に法る）」「法天常（天常に法る）」などさまざまな同じ意味の言葉に言い換えられるが、全体として「順」は78、「法」は144であり、やはり「法天」系が多い。さらに「順天」系、「法天」系だけでなく、「参天地」などの語彙も各所にあり、『黄帝内経』の「天道」思想は、表現がいつそう豊かになっていることが分かる。それらを具体的に示そう。

「陰陽に従えば則ち生き、これに逆らえば則ち死す。これに従えば則ち治まり、これに逆らえば則ち乱れる」（『素問』四気調神大論篇）

「六経は川為（た）り、腸胃は海為（た）り、九竅は水注之氣為り。天地以て之を陰陽と為し、陽の汗、天地の雨を以て之を名づく。陽の気は、天地の疾風以て之を名づく。暴気雷を象（かたど）り、逆気陽を象る。治するに天の紀に法らず、地の理を用いざれば、則ち災害至るなり」（『素問』陰陽応象大論）

「いま末世の刺や、虚するものはこれを實し、満つるものはこれを泄（も）らす。これ皆衆工の共に知るところなり。もしそれ天に法り地に則

れば、応ずるに従い動ず。これに和する者は響くが如く、これに従う者は影の如し。道に鬼神なし、独り来たり独り往く」（『素問』宝命全形論）

「黄帝問いて曰く。用鍼の服（こと、＝技術）、必ずや法則あらん、今、何の法、何の則や。岐伯対（こた）えて曰く、天に法り地に則り、合するに天光（＝日月星）を以てす。帝曰く。願くは卒（ことごと）くこれを聞かん。岐伯曰く、凡そ刺の法、必ず日月星辰四時八正（＝二至、二分、四立）の気を候い、氣定まりて乃ちこれを刺す。是の故に天温かに日明らかなれば、則ち人の血、淖液（＝潤滑に流れ）して、衛氣浮かぶ。故に血寫し易く、氣行り易し。天寒く日陰（くも）れば、則ち人の血凝泣（＝凝滞）して衛氣沈む。月始めて生ずれば、則ち血氣始めて精にして、衛氣始めて行る。月郭満つれば、則ち血氣実し、肌肉堅し。月郭空なれば、則ち肌肉減じ、経絡虚し、衛氣去り、形独り居る。是を以て天の時に因りて血氣を調うるなり。是を以て天寒くして刺すこと無かれ、天温かにして疑うこと無かれ。月生じて寫すること無かれ、月満ちて補すること無かれ。月郭空にして治すること無かれ。是れを「天の」時を得てこれを調うと謂う」（『素問』八正神明論）

「人と天地相参じ、日月と相応じるなり」（『靈枢』歳露論篇）

「天の時に順えばすなわち、病、期を与うべし。順う者は工為（た）り、逆う者は粗為り」（『靈枢』順氣一日分為四時篇）」

「足の陽明は、五藏六府の海なり。其の脈は大にして血多く、氣盛んにして熱壯んなり。此を刺す者は、深からざれば散ぜず。留めざれば寫せざるなり。足の陽明は刺すこと深さ六分、留ること十呼。足の太陽は深さ五分、留ること七呼。足の少陽は深さ四分、留ること五呼。足の太陰は深さ三分、留ること四呼。足の少陰は深さ二分、留ること三呼。足の厥陰は深さ一分、留ること二呼。手の陰陽は、其の氣の受くるの道近く、其の氣の來ること疾し。其の刺すこと深き者も、皆二分を過ぐることなし。其の留むることも、皆一呼を過ぐることなし。其少長、大小、肥瘦、心を以て之をはかる。命（な）づけて天常に法ると曰う。之に灸するもまた然り。灸して此れに過ぐる者は、悪火を得れば則ち骨枯れ脈渋る。刺して此れに過ぐる者は、則ち氣を脱す。（『靈枢』経水篇）

これらから、政治書『黄帝四経』の主軸であり、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』と連綿と継承されてきた黄老「天道」思想の、自動運動する機械的宇宙論の側面は、医学書『黄帝内経』の心臓部に息づいていることが理解できる。政治書では脇役とされていた、生を養い病を治する医療思想や治療技術論が主役として入念に磨きあげられているが、その骨格は、間違いなく『黄帝四経』に水源を持つ「天道」思想であり、その意味で『黄帝内経』は黄老文献といえることが分かるはずである。

◇人に天殃をあたう～黄老文献の隠れたしっぽ

では、「天道」思想のもう一つの側面、災異思想はどうだろうか。

当初、わたしは、『黄帝内経』は医学書なので、「天道」思想の二つの

性格のうち、政治思想に必須の①災異思想はなく、②機械論的宇宙論だけが展開されているのではないかと単純に予想していた。『管子』から『春秋繁露』に至る黄老文献は、災異思想と親和性がある鬼神信仰を排除していないが、『黄帝内経』は、現代中医学の研究者が無神論と断定するほど鬼神を否定した気思想に立脚していることから、そう想定したのであった。ところが、そうではなかったのである。

『黄帝内経』において「災」および同じ意味の文字を含む文は、上記の『素問』四気調神大論篇、陰陽応象大論篇のほかにも次のものがある。

「故に陰陽四時は、万物の終始なり、死生の本なり。之（＝陰陽四時）に逆えば則ち災害生じ、之に従えば則ち苛疾起こらず。是れを道を得ると謂う」（『素問』四気調神大論篇）

「故に主明らかなれば則ち下安んじ、これを以って生を養えば則ち命長し、世を歿（お）うるまで殆（あやう）からず。以って天下を為（おさ）めれば則ち大いに昌（さかん）なり。主明らかならざれば則ち十二官危うし、使道（しどう、＝経脈）、閉塞して通ぜず、形（＝肉体）乃ち大いに傷（やぶ）らる。此れを以って生を養えば則ち殃（わざわい）あり、以って天下を為（おさ）むる者は其の宗（むね、＝宗族）大いに危うし。之を戒めよ之を戒めよ」（『素問』靈蘭秘典論篇）

これら「災害」「殃」は、鍼灸治療や日常生活で、天地陰陽の法則に則らなければ、誤治が生じ病気は悪化することを意味している。直接には四季の気のリズムを無視した治療や養生という間違っただけから、気の平衡がいつそう乱れ、悪い結果になると指摘している。表面だけ理解すれば、医学思想が、病気の原因を天の怒りや鬼神の祟りとする呪術的、シャーマンの段階から、気の陰陽平衡の失調と捉える機能的、合理的段階に進化したことを物語る記述といえなくもない。事実、正統派の中国医学史家たちは、そう解釈している。

しかし、そのようにすっきりと単線を引くなら、シャーマニズムや鬼神信仰、上帝への畏怖などが交錯する古代意識の混沌の中から、「医の思想」が立ち上がる、闘争に満ちた過程を想像することは不可能である。上記の「災害」「殃」という文字は、単に合理的な意味での治療の失敗という次元にとどまらない。それが、失政に対する天の譴告という意味を漂わせていることは、以下のように、治療の失敗を論じる際に、「過なき（＝無実の者）を誅罰し」「鍼を用いるに義なくば」と政治的な失政を比喻とし、その結果、「[天は] 人に天殃（てんおう、＝天が譴告のために下す災い）を予（あた）う」と表現していることから推し量れる。『黄帝内経』の「災害」「殃」の概念が、黄老文献に共通する災異思想とまったく無縁な水準にまで合理化されている、とは言えないのである。

「刺すに三部九候の病脈の処を知らざれば、[邪気の] 大過の且（まさ）に至るありと雖（いえど）も、工、[その太過を] 禁ずる（＝防ぐ）

こと能わざるなり。過なきを誅罰する（＝寫すべきでないのに寫す）を命（な）づけて大惑と曰う。反って大經（＝十二經脈）を乱し、真（＝真氣）、復すべからず。実を用いて虚となし、邪を以って真と為す。鍼を用いるに義なくば、反って気の賊と為りて、人の正気を奪い、従を以って逆と為し、榮衛散乱し、真氣已に失し、邪独り内に著（つ）き、人の長命を絶ち、人に天殃（てんおう）を予（あた）う。三部九候を知らざれば、故（もと）より久しく長ずること能わず」（『素問』離合真邪篇）

（※この文は、『黄帝四経』ないし、何らかの黄老兵書を下敷きにしているという印象がある。検討すると面白い結果が得られるかもしれない。）

『黄帝内経』の「災害」「殃」の考え方は、たしかに一見、鬼神信仰を排除し、災異思想から脱却した合理的で機械論的な「気の医学」の表現であるかのようである。しかし、「過なきを誅罰し」「鍼を用いるに義なくば」という政治文書ならびに言ひ回しは、『黄帝四経』以来の政治的な災異思想の系譜を踏まえなければ理解できるものではない。そのことをさらに明瞭に証言しているのが、次の「反りて其の殃を受く」という言い方である。現代人の尾てい骨が猿人のしっぽを保存しているように、それは戦国以降の黄老文献の隠されたしっぽである。

◇反りて殃を受く～范蠡に始まる黄老の定型句

「黄帝乃ち与（とも）に俱（とも）に齋室に入り、臂（ひ、＝腕）を割き血を敵（すす）る。黄帝親（みず）から祝（しゆく、＝呪文を唱える）して曰く、今日正陽（せいよう、＝正午）に、血を敵り方を伝えんとす。敢えて此の言に背く者あらば、反りて其の殃を受けん」（『靈枢』禁服篇）

「鍼を用いるの服（＝学習）、必ず法則あり。上は天光を視、下は八正（＝四季、八節・立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至）を司（うかが）い、以て奇邪を辟（さ）け、しかして百姓に觀（しめ）して、虚実を審（つまびらか）にし、其の邪に犯さるることなからしむ。是れ天の露を得、歳の虚に遇わば、救うも勝たず、反りて其の殃を受く。故に曰く、必ず天忌を知り、乃ち鍼意を言え」（『靈枢』官能篇）



范蠡を主人公にした香港TVドラマ『争覇传奇』

「反りて其の殃を受く」は、史書では、まず、周代の歴史を記述した『国語』越語下の、呉の討伐をはやる越王に向けた宰相、范蠡の諫言の中に現れる。

「上帝なさざれば、時の反るを是れ守る（=天帝がまだ計画を成立させないうちは、天の時が反るのを待つべきである）。強いて策（もと）むる者は、これ不祥（=不吉）なり。時を得て成さざれば、反りて其の殃を受く。徳を失い名を滅ぼし、流走死亡す。〔天は〕奪うあり、予うるあり、予えざるあり。王、はや

く凶るなかれ」

漢代の司馬遷編『史記』越王勾踐世家では、この范蠡の言を、「天与うるに取らざれば、反って其の咎（とがめ）を受け、時至るも行わざれば反って其の殃を受く」と簡潔に整理している。「天が〔敵国をわがものとする好機を〕与えてくれているのに、その恩寵を受け取らなければ、天の仁愛は反転して、咎めを受け、天の時が至っているのに行動しなければ、天の仁愛は反転して、殃を受ける」と、天の威を畏れる災異思想の文脈で兵略が説かれている。

浅野裕一や中国の研究から、『黄帝四経』の黄老思想の形成には、范蠡の思想が深く影響していることが知られている。范蠡に始まる「反りて其の殃を受く」の定型句は、『黄帝四経』の『十大経』『称』に、次のように現れる。

「天には固（もと）より奪うあり予（あた）うるあり。祥あり〔不祥あり。天予うるも〕受けざれば、反りて以て殃に随（あ）う」（『十大経』兵容篇）

「天は寒暑を制し、地は高下を制し、人は取予（しゅよ、=奪うと与える）を制す。取予当たれば（=天の意思にかなっていれば）、立ちて〔一字空白〕王となる。取予当たらざれば、之を流して死亡せしむ。天に環形あり。反りて其の殃を受く」（『称』第十七章）

「天に環形あり」とは、次回に詳しく検討するが、天地の気が上下、四時の形で循環していることを指す。天の気のおもむくところに順い、敵国を奪うべき時に奪わなければ、その気は回り巡って災いとなり、自国に降るといふ論理である。

さて、「反りて其の殃を受く」の定型句は、以後の黄老文献である『呂氏春秋』『淮南子』にも採用されている。両者ともほぼ同じ内容で、季節に合わせて王が為すべきことを定めた時令説の個所である。

「是の月や、（中略）有司（＝役人）に命じて、申（かさ）ねて百刑を厳にし、斬殺必ず当り、枉撓（おうどう、＝曲げたり手心を加えること）あることなからしむ。枉撓当らざれば、反りて其の殃を受く」（『呂氏春秋』仲秋紀・八月紀）

「仲秋の月（中略）有司に命じて、申ねて百刑を厳にし、斬殺必ず当り、枉撓あることなからしむ。獄を決して当らざれば、反りて其の殃を受く」（『淮南子』時則訓）

『黄帝内経』の「反りて其の殃を受く」論は、形式化していて、もはや天への畏怖に真底おののく気配は感じられない。とはいえ、災異思想のかすかな記憶を遺しつつ、歴代黄老文献の延長に位置しているのである。これは、正統派の中医学の唯物史観や治療技術論に特化した日本の『内経』研究の視点からは、見過ごされてきた事実である。

長い考察のあとに、わたしたちはこう結論することができる。『黄帝内経』の「天道」思想は、『黄帝四経』以降の黄老文献の「天道」思想が孕んでいた機械論的宇宙論の直系である。それだけでなく、その黄老「天道」思想のもう一つの軸、災異思想の記憶も、わたしたちモンゴロイドにある青い出生の母斑のように保存しているのである。

『黄帝内経』の「天道」思想は、中医学の教科書などが唯物論的、無神論的宇宙論と呼ぶものに還元することはできない。いわゆる「唯物論的、無神論的」な気の宇宙論が、災異思想が持っていた天を畏怖し神秘とする古代的感覚と二つながら一つに重なっているのである。『黄帝内経』の、この多元的でアンビバレンツな構造は、まさに戦国から漢代に至る黄老文献そのものの性格であった。

 ツイート { 0 }

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

HOME

HUMAN WORLD
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [お宝市場](#) | [求人天国](#)

株式会社 ヒューマンワールド

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.